

CESCHI NEWS LETTER

京都大学大学院文学研究科附属 文化遺産学・人文知連携センター ニュースレター

京都大学デジタル人文学国際学会 KUDH2021

「Digital Transformation in the Humanities」

デジタル人文学は、デジタル技術を用いて文化資源・人文資料の保全・展示・分析・教育を行う学際的な研究分野です。この度、人文知連携の旗印のもと、本学で活躍する3名のデジタル人文学研究者を中心として、ヨーロッパおよびアメリカ合衆国から、7名のデジタル人文学の研究者・実践者を招き、国際学会を開催しました。取り上げられた分野は、デジタルコーパス、文字符号化、デジタルアーカイブの3つです。参加者の時差なども考慮し、3日間にわたって4つのセッションをおこないました。本国際会議には、37の国または地域から207名が登録し、第1日目に

は36名、第2日目には53名、第3日目には43名の参加がありました。

第1日目 (10月2日 (土))

セッション 1-a :

“Digital Corpus and Syntactic Annotation through Universal Dependencies: UD Treebanks for Coptic, Classical Chinese, Old Japanese, and Ainu”
(デジタルコーパスと Universal Dependencies による統語情報付与: コプト語、古典中国語、上代日本語、アイヌ語のための UD ツリーバンク)

アメリカ合衆国・ジョージタウン大学准教授のアミール・ゼルデス (Amir Zeldes) 氏の “UD Treebanking for Coptic DH: Low Resource NLP Technologies for NER, Lexicography and Linked Open Data” (コプト語デジタル人文学のための UD によるツリーバンク：固有表現抽出、辞書開発、Linked Open Data のための少資源自然言語処理) では、コプト語の多層タグ付きコーパスプロジェクトである Coptic SCRIPTORIUM の最新の発展、すなわち、現在自然言語処理の分野で盛んに発展してきている Universal Dependencies による係り受け解析の精度向上と、最新の深層学習を用いた固有表現抽出、そのほか Linked Open Data をもちいたコーパスおよび辞書開発についての発表がなされました。

人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター教授の安岡孝一氏は、“UD for lzh (Classical Chinese) ojp (Old Japanese) and ain (Ainu)” (古典中国語、古典日本語、アイヌ語のための UD) で、stanza や spaCy-RoBERTa などを組み込んだ deplacy という UD 解析器を用いた UD による係り受け解析の成果を発表し、とくにこれら東アジアの諸言語を用いた UD 解析に関する諸問題について論じました。

この日は、コプト語や古典中国語、古典日本語、アイヌ語という、古典語および消滅危機言語の自然言語処理が主たるテーマとなり、世界中のどんな言語でも適用できるように設計された UD の利点とまだ完全に全ての言語には対応できていないいくつかの問題点が明らかにされました。

第2日目 (10月16日 (土))

セッション2：“Character Encoding of Complex Scripts: Chinese, Mayan, and Egyptian Hieroglyphs”
(複雑な文字の符号化: 漢字、マヤ文字、エジプト・ヒエログリフ)

長年、あらゆる漢字の記述と符号化を行う CHISE プロジェクトを牽引してこられた、京都大学人文科

学研究所東アジア人文情報学研究科の守岡知彦氏は、“Machine-readable description of Chinese Characters” (漢字の機械可読な記述) で、CHISE プロジェクトによる漢字構造記述と符号化について報告しました。

ドイツ・ボン大学のカルロス・パラソ・ガヨル氏は、“The Encoding of Mayan Hieroglyphic Writing” (マヤ聖刻文字の符号化) で、マヤ文明で用いられたマヤ聖刻文字の符号化プロジェクトの歴史と現在について報告しました。マヤ文字は漢字やヒエログリフよりもさらに複雑で、同じ語を表す際にも複数の書き方があり、また、文字素の配置も非常に多数のパターンがあります。現在、ほとんどのパソコンで用いられている、文字の符号化規格である Unicode にはマヤ文字は登録されていないものの、現在文字の配置のパターンを集約しており、将来 Unicode に追加されることが期待されます。

イギリス・セントアンドリューズ大学教授のマーク・ヤン・ネーデルホフ氏は “Unicode Control Characters for Ancient Egyptian” (古代エジプト語のための Unicode 制御文字) を報告しました。古代エジプト語はヒエログリフなどの古代エジプト文字で書かれてきましたが、ヒエログリフが Unicode に登録されたのは 2009 年になってからのことでした。最初に登録されたものは、最も基本的な文字だけで、しかも、方形が埋まるように様々な形の文字を縦横にはめ込んでいくような実際のヒエログリフで行われた複雑な配置を行うことはできないものでした。近年になってネーデルホフ氏を中心とするチームが、この複雑なレイアウトを可能にする制御文字を Unicode へ追加することに成功しました。

本セッションでは、漢字、マヤ文字、ヒエログリフとも、方形の枠の中に文字素や文字をはめ込んでいくために、それらのレイアウトを示す符号が必要なことなど、それぞれの文字を符号化する上での共通点や相違点がみえてきたという成果がありました。

セッション 3:

“Digital Archiving and Curations: Kyoto, Leipzig, London, and Stellenbosch” (デジタル・アーカイビングとキュレーション: 京都、ライプチヒ、ロンドン、ステレンボシュ)

京都大学図書館助教の西岡千文氏は、“The Development, Collaborations, and Evaluation of the Kyoto University Rare Materials Digital Archive” (京都大学貴重資料デジタルアーカイブの発展、コラボレーション、そして進化) で、京都大学貴重資料デジタルアーカイブの歴史と現在の状況について発表しました。コロナ渦で話題になった妖怪「アマビエ」や大学入試試験で取り上げられた源氏物語の写本など、ネットで話題になるのと同時にデジタルアーカイブ上のアイテムのアクセス数が急激に伸びたことなど、どのような出来事がデジタルアーカイブへのアクセス数の向上に結びつくかに関する議論が大変印象的でした。

ドイツ・ザクセン学術アカデミーのフランツィスカ・ネーター氏は、“Current Trends in Digital Editions and Curatorial Practice: Examples from Leipzig, London and Stellenbosch” (デジタル学術編集版とキュレーションの実践: ライプチヒ、ロンドン、ステレンボシュの例) を報告しました。ネーター氏は、エジプト学者、そして学芸員としてドイツのライプチヒ、イギリスのロンドン、そして南アフリカのステレンボシュの博物館や諸学術機関で古代地中海世界の収蔵品の展示に関わった経験があります。本発表では、様々な大学の学生らとともに共同で行った、3D など最新技術を使用した先進的なデジタル展示の事例が紹介されました。

3 日目 (10 月 23 日 (土))

セッション 1-b: “Session 1-b: Digital Corpus and Syntactic Annotation through Universal Dependencies: Vedic Corpus, Language

Comparison through UD, Potential and Limitations of UD” (デジタルコーパスと Universal Dependencies による統語情報付与: ヴェーダ語コーパス、UD による言語比較、UD の可能性と限界)

Universal Dependencies の創立時からかかわっている Dan Zeman 氏 (プラハ・カレル大学教授) は、“Universal Dependencies: Comparing Languages in Space and Time” (Universal Dependencies: 通時的・地理的に諸言語を比較する) を報告しました。本報告では、UD の歴史から、現在 UD がどれほど歴史言語学や言語類型論に貢献しているかについて、事例を挙げながら説明がありました。

京都大学白眉センター特定准教授の天野恭子氏の報告は、“Historical Background of the Formation of the Veda in Ancient India, as Deciphered from the Visualization of the Influence Relations among the Vedic Texts” (ヴェーダ文献の影響関係の視覚化から解明された古代インドにおけるヴェーダの形成の歴史的背景) です。まだ時代や地域がわかっていないヴェーダ文献を、計量文献学の手法で時代や地域がわかっている他の文献との距離を調べ、それらを視覚化し、時代推定や地域推定をした結果を発表されました。また、天野氏が現在進めているヴェーダ文献のコーパス化、形態素情報のタグ付け、そしてヴェーダ語の Universal Dependencies についても解説されました。

ライプチヒ大学・ジュゼッペ・チェラーノ氏は、Arethusa という古典ギリシア語とラテン語の Universal Dependencies で統語情報を記述するためのウェブアプリの開発チームのリーダーで、ラテン語・古典ギリシア語のコーパスとして有名な Perseus Digital Library の統語樹データベース (ツリーバンク) である Perseus Treebank の開発にも携わってきました。チェラーノ氏は、自身が UD のツリーバンクを開発していく中で、古典ギリシア語やラテン語でうまく当てはめることができない、UD の諸要素

を指摘し、全ての言語を同じ記法で統語分析することを目指す UD の理念を実現するための改善点を多数指摘しました。

各報告の後には、ゼマン氏、チェラーノ氏、安岡氏の間で UD の解決すべき問題が議論され、最後は大変白熱した議論で幕を閉じました。

なお、本国際会議の録画は、京都大学文学研究科・文学部人文知連携拠点成果公開 WEB で公開されております。本ウェブサイトの「教員ムービー」の項目で、会議の様子をご覧いただければ、幸いです (<https://www.ceschi.bun.kyoto-u.ac.jp/kyoten/>)。

センター開催行事日誌(2021年10月～12月)

■2021年11月27日(土)(内陸アジア学推進部門)

第86回羽田記念館定例講演会を開催しました。

<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/ceschi/hkk-nextmeeting-2/>

■2021年11月19日(金)(人文知連携拠点)

人文知連携共同研究会 第十回東アジア「間文化」研究会を開催しました。

■2021年12月4日(土)

(ユーラシア宗教遺産学部門)

ユーラシア宗教遺産学部門での研究活動を元に、2021年度京都大学文学研究科・文学部公開シンポジウム「ユーラシアにおける宗教遺産研究の可能性—伝播と融合—」を開催しました。

<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/events/2021symposium/>

■2021年12月12日(日)(人文知連携拠点)

人文知連携共同研究会「人文学の方法論」第三回研究会『人文学の方法論—歴史学の場合—』を開催しました。

京都大学文学研究科・文学部
公開シンポジウム

オンライン開催

ユーラシアにおける 宗教遺産研究の可能性

— 伝播と融合 —

Speaker

横地 優子
Yoko Yohuchi
「初期ヒンドゥー教における南アジアの基層文化」
本研資料教授 インド古典学

宮崎 泉
Izumi Miyazaki
「インド文化と仏教」
本研資料教授 仏教学

檜山 智美
Satomi Hiyama
「敦煌壁画に見られるインドと中国の世界観の習合」
自研センター特定助教 仏教美術史学

古松 宗志
Takashi Furumatsu
「契丹(遼)の王権と信仰」
人文科学研究所教授 東洋史学

上島 享
Susumu Uejima
「日本中世の神と仏」
本研資料教授 日本史学

吉田 豊
Yutaka Yoshida
「日本にある江南マニ教絵画から見えてくること」
本研資料名誉教授 言語学

Commentator

小倉 智史
Satoshi Ogura
東京外国語大学准教授
西南アジア史学

2021年12月4日(土)
オンライン開催 13:00~17:30

事前登録制

参加するためには事前登録が必要です。左のQRコードまたは下記URLよりお申し込みください。
<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/events/2021symposium/>

主催 京都大学大学院文学研究科
共催 京大以文会
後援 京都大学文学研究科総務課
申込 075-753-2200(11~19:00) 075-753-2201

<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/>

京都大学大学院文学研究科附属 文化遺産学・人文知連携センター

〒606-8501 京都市左京区吉田本町京都大学大学院文学研究科

URL: http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/ceschi/ces-top_page/

